慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	真野古墳群攷
Sub Title	An essay on the assemblage of the ancient tombs in Mano
Author	清水, 潤三(Shimizu, Junzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.577- 595
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	考古民族・ 地理 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0582

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

真野古墳群攷

清水潤三

(一)

われわれの「史学」が五十巻を数えるに至り、記念号の刊行企劃が口にされるようになってから既に久しい。今ようやく機が熟したわけであるが、塾の史学科に学んだ者にとっては何はともあれなつかしく、嬉しい限りである。学生の頃にはじめて配布されたのは十五巻だったと思うが、史学科最古参の教師（先輩の方々はこの言葉を使われた、とくに間崎先生の口癖であった）になった今日、この記念号には必らず筆を執らねばと考えつづけていたのだが〝好事魔多し〟のたとえそのままに入院の憂き目にあってしまい、やっと三田の山に登れるようになった時は〆切が目前に迫っている。正直のところ大へんな苦境に追い込まれたわけであり、あれこれ頭を悩ましてみても性来マメな方ではないからマトモな論文の題材として手持ちのネタなどがあるはずもない。ところが幸いなことに昔いくたびか発掘調査を行った〝真野古墳群〟が昭和五十四年一〇月二四日附で国の史跡に指定され、病院から直行の形で現地に赴き、記念の公開講演を行ったばかりであることにフト気がついた。その時の話の内容は必らずしも学術的なものではなかったけれど、やはり現地に赴くと少しはちがった考えも浮ぶもので、教えられるところが多かった。そこで表題に〝攷〟の字を加えることにして原稿用紙に向うことができた次第である。

（二）

真野古墳群は福島県相馬郡鹿島町（もと真野村）にあって、終戦時壊滅状態にあった慶応大学の考古学研究を再建する契機となった記念すべき発掘調査が行われたところである。すなわち昭和二十二年七月の予備的な調査をはじめとして、同年十一、十二両月にかけては三週間に及ぶ第一次調査を実施し、さらに昭和二十四年一月、三十二年八月、三十六年二月と三回に亘って補足調査が行われた。私は最後の時だけは参加しなかったが、最も長期に亘り、且つ成果の大であった昭和二十二年末の第一次調査の際には藤田亮策先生の助手を勤め、第二次、第三次の調査を江坂輝弥君と共同して行ったのであった。今とくに心に残るのは終戦直後の厳しい環境の中でそのような長い期間の継続調査を行い得たのは、松本信広先生が塾の考古学の確立に注がれた情熱の賜物であり、藤田先生の暖い尽力によると信じて疑わない。すなわち調査の成果は後述するように当時における一大学のプロジェクトとしては稀に見るものがあったと言える。ただ数次に亘る調査を纏めた報告書の刊行が未だに実現を見ていないのは遺憾であり、ここに筆をとった理由でもある。

すなわち第一次（昭和二十二年）の成果については藤田先生が自ら史学の二十三巻三号に報告されているけれども、第二次以降については私が「末永先生古稀記念古代学論叢」に事実のみを略述したに止まり、何か釈然としない気分に捉われながら今日に至った。もちろん本稿がその責を果すに足るものとはいえないが、再訪の機を得て新らしく脳裡に浮んできた幾つかの問題を提起して大方の示教を得たいと思うのである。

（三）

さて現在における私見を述べる前に、従来の報文がいずれも読者にとって披見が困難な状態にあると思われるので、過去における調査の概要について記し、後段において現時点での私の考えを述べて大方の示教を請うことにする。

(1) 古墳群の概観

この真野古墳群は福島県相馬郡鹿島町にあるが、町村合併以前は真野村の地内であった。先ずその所在地について見ると、鹿島町の範囲は東は太平洋に面する海岸から西は直線距離にして十五キロあまりの阿武隈山地に及ぶが、その山中から流れ出た真野川によって開かれた西北から東南に向けて海岸に至る細長い沃野を中心とし、三方が丘陵地帯によって囲まれている。鹿島町の市街は蛇行する真野川の東岸低地に発達しているが、西岸では南側に連なる丘陵が迫って河床に向けて急崖を形成している。この真野川右岸の丘陵上は概ね緩かな斜面か平坦地となっており、開墾された畑地と古来の山林とが相半ばして原野と呼ぶにふさわしく、幾つかの集落が点在している。古墳群はこの台上の字小池原、八幡林、大谷地の地区に営まれ、それらを併せて真野古墳群と呼んでいる。従って今日の字の範囲は古墳とは無関係と見るべきであるけれども、古墳の数が多くて何等かの区分を必要とすること、さらに今日の道路などによって字の区域がかなり明示できるので所在を明らかにし易い利点があるために、われわれは字小池原にあって二〇基の円墳から成る一群を小池原古墳群、大字寺内字八幡林にあって五〇基以上から成る八幡林古墳群、またそれと県道を隔てて南側の字大谷地にある約三十基の大谷地古墳群の三群に分けて調査を行ったのであった。ただ此の区分は今日の字名をもとにして我々が便宜的に設定したものであるから、築造当時の実情を示すものではないと云える。特に八幡林、大谷地の両群は併せて寺内古墳群と呼ぶのが便利で、後段ではこの名称を用いた場合が多い。ところが興味深いことには発掘調査を実施してみると、それぞれの群の古墳はかなり独自の特色をもち、たとえば前方後円墳を含むものと含まぬものとか、墳丘の大小、石室の構造にそれぞれ特色を示すとか、さらには副葬品に顕著な相違があるなどの興味深い事実を明らかにし得たのであった。それらの調査結果に関しては後に述べたいと思うが従来あまり詳しく報告されたことがないのは藤田先生が速断を厳しく戒められたからであり、長期に亘って継続的な調査を予定しておられた先生の厳正な態度にわれわれが心から敬意を表していたためである。

(2) 過去の調査について

(i) この古墳群はわれわれが始めて発見し調査したものではなく、最初の報告は古く大正十二年に遡る。すなわち人類学雑誌第三九巻第三号に小此木忠七郎が「昨年発掘せられたる福島県下の古墳」という報告を寄せており、それによると円墳の中央に砂岩質の切石を長方形に立て並べて粘土を厚く塗った上に切石三枚を並べて蓋とした主体部があり、その中に女性人骨が納められ、鹿角装刀子と竹櫛各一点が副葬されていたと記している。われわれの調査の際この古墳は〝寺内一〇三号墳〟として記録されたのであるが、この種の粘土塗石槨とでも称すべき内部施設は小規模な円形封土とともに此の古墳群にかなり一般的なことが明らかにされた。

また戦前に長く本塾文学部で考古学を講ぜられ、筆者もその席に連なり、日吉キャンパス周辺の調査に際して指導を受けた柴田常恵先生もこの近くの古墳を調査されたといわれるが、その結果は明らかでない。

(ii) さて昭和二十二年になると、この丘陵上、特に寺内古墳群の周辺が開拓営団による開墾作業の対象とされて伐採地均しの作業が始まり、古墳群の運命は風前の灯という状況に陥った。丁度この時御郷里であるこの地に隠棲しておられた植松練磨氏が旧知の松本信広先生にその旨を通報され、慶大による学術調査を求められたのであった。

松本先生はこの要望にこたえて、まず江坂輝弥君を派遣して後藤守一氏とともに現地の状況を把握することに努められた。その結果、帰京した江坂君の報告によって寺内にある前方後円墳は粘土採掘のため大破しており、小池原古墳群の円墳二基は開拓営団の技手原田道雄氏の発掘によって石室を露出し、その一基には人骨が、他の一基からは甲の小札らしきものが発見されたこと、さらに耕作者である小林吾助氏によってこの古墳の封土の一部から青銅製の馬鐸三個が発見されていることも明らかになった。幸いに馬鐸のうちの二個は江坂君が小林氏に懇請して本塾に寄贈していただき、今日もわれわれの研究室に保存されている。

(iii) 七月の予備調査

かくて現地の状況が極めて切迫していることが明らかとなったので、七月三十日に藤田先生、筆者、江坂君、堀田穣君の四名が急ぎ現地に赴くことになり、後藤守一氏も同行されることになって仝地における実情の把握と発掘調査の準備、計画の立案が行われるとともに、小池原古墳群の二基（原田氏の発掘した小池原七号と同八号）を詳しく調査して実測図を作製した。とくに第八号墳では石室の底部に木炭を敷き側石の内部に丹を塗っていること、鉄器残片が発見されたことから、さきに土地の人びとが発見した鉄製馬具がここに置かれていたことをも確認することができた。しかし青銅製馬鐸は墳丘北隅の石室外にあったとする発見者の証言を信ずるほかはなく、若干の疑問を懐きつつ調査を終ったのであった。なおその直後の八月中旬には県立相馬高等学校の教官生徒諸君が小池原二〇号、寺内二二号の二基の古墳を調査し、前者から土師器壺一個を発見している。また後者の二二号墳では石室などの設備が発見されず、副葬品も全く見られなかったということである。

右のような現地の状況が明らかとなったからには、これら多数の古墳が完全に破壊されるのも最早や時間の問題であって、学術的な発掘調査を早急に実施するほかはないとの決断が下され、幸い植松氏をはじめ現地の方々の理解と温かい支援を得られたので、開拓営団側の作業予定との折り合いもつき、十一月に本格的調査を行うことができたのであった。

（四）第一次調査の概要

右のような経緯を経た上で第一次調査が同じ年の十一月十八日から十二月九日まで約三週間に亘って実施された。藤田先生を中心に筆者、河北展生、江坂輝弥、堀田穣、山鹿太郎、向井忠、谷明、杉上昌幸などの諸君がこれに参加し、明治大学の後藤守一氏も協力されたが、藤田先生は此の混乱の時期において松本信広先生はもとより文学部長の間崎万里先生、塾長秘書の西岡秀雄君など史学科関係者全員の力づよい支援、塾当局の理解と協力を得られたことに

深く感謝の意を表しておられる（前記の報告「史学第二十三巻第三号」参照）。さらに現地では植松練磨氏はもとより、渡部晴雄、但野修清、大内重春の諸氏が献身的な支援を惜しまれず、福島県からも史跡調査委員の梅宮茂氏が特に出張され、相馬、鹿島、真野、八沢などの中小学校の教官生徒の方々にも多大の援助を受けることができたのであった。われわれも人員の不足と物資の欠乏に悩まされたが、戦時中の長い耐乏生活にたえた体験によって克服することができたといえるかもしれぬ。とくに後半においては寒さに悩まされ病人や負傷者を出さなかったのが何よりであったといえる。

さて此の第一次の調査とさきの予備調査で得られた成果を藤田先生は本誌の二十三巻三号に執筆された概報の中で表にまとめておられる。まことに簡にして要を得ているので、つぎに再録しておこう。

また表に示されていない点をも含めて若干の解説を試み、各古墳群の特色をさらに明確にしてゆきたい。

(A) まず小池原古墳群においては調査した小池原第七、同第八、同第二〇号の三基がいずれも直径一五メートルほどの小形の円墳で前に触れた如く塊石を積んだ石室に板状の石蓋を乗せ、粘土で厚く被覆していることが知られ、副葬品は第八号墳を除いて顕著なものがなく、少量であることが知られた（左表(イ)参照）。

(イ) 小池原古墳群

番号	仮番号	形状、大小	発掘状況	遺物	調査月日	調査者
七	1	円墳径12m	塊石積石室石蓋	人骨	二二・七・三一 八・一	後藤・江坂
八	2	円墳径約14m	同	鉄馬具・銅馬鐸	二二・七・三一 八・一	藤田・清水
二〇		円墳	同	土師器壺一	二二・八	相馬中学校

(B)次に寺内古墳群の場合には第一一一、第一一五号とした二基の前方後円墳が含まれ、ともに周湟をめぐらしていたことをたしかめたが、此の時の調査では両者ともに封土の中に三層の砂層が存在することを確認し得たのみで主体部を発見することが出来なかった。ただ後に至って両者ともに極めて特異な埋葬施設が発見されたが、それについては後段に述べることにしたい。そのほかこの古墳群では二、六、七、八、一〇、一一六、一一七、一一八号とそれぞれ仮称した八基の円墳を発掘した。そのうちで山鹿君が調査した八号墳の実測図を載せておく。箱形石室に丹を塗り、内部には第2図に示したように頭蓋骨、四肢骨が残っていた。

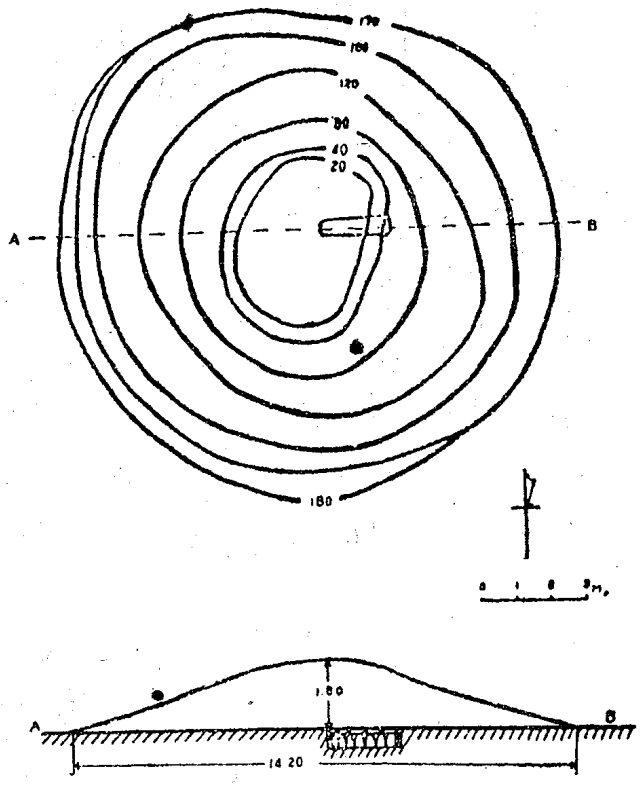
なおつぎの藤田先生が作られた一覧表には上下二段の番号が附せられていて一見不審に思われるけれども、むしろ下段の〃仮番号〃とされたのが今回の調査に際して使われたものであり、われわれはそれを連日使用し、実測図をは

(ロ) 寺内古墳群

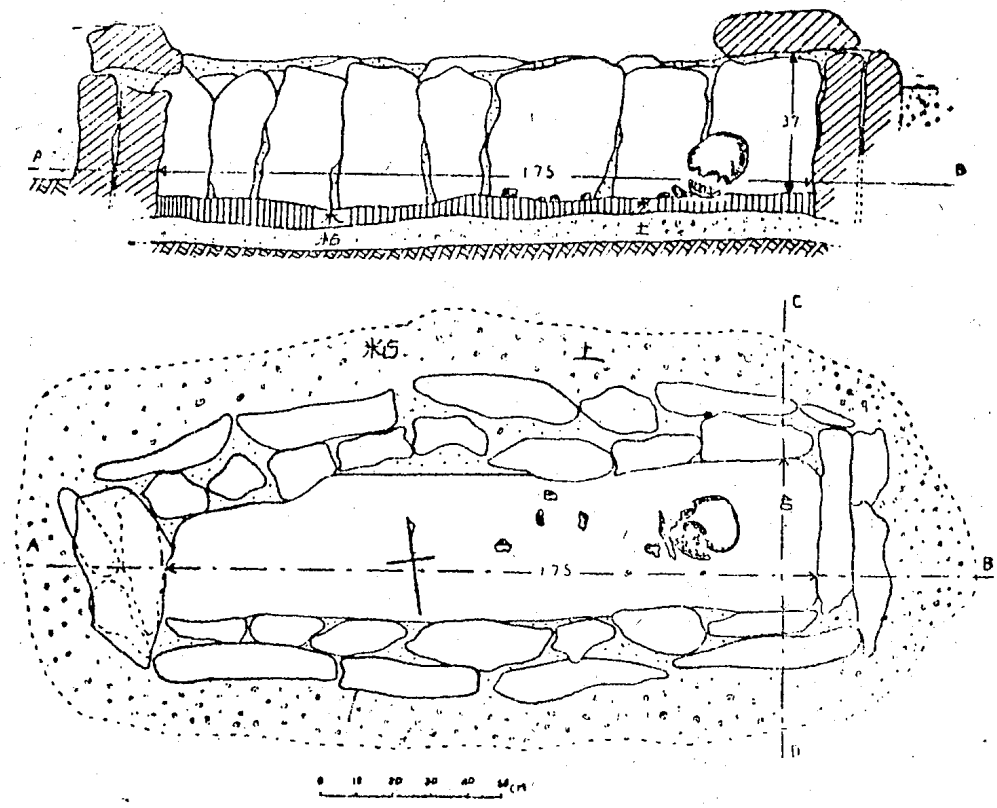
番号	仮番号	形状、大小	発掘状況	遺物	調査月日	調査者
七	103	円墳	粘土張箱形石室	人骨・刀子・櫛	大正十二・五・一〇	小此木忠七郎
二〇	111	前方後円墳 環湟	砂層三段石室ナシ		昭和二二・十一月	河北
二三	116	円墳 封土欠失	積石長方小石室	刀子一	同	河北
二四	115	前方後円墳 環湟	石室ナシ砂層三段		同	河北
二七	118	円墳	同		同	河北
二六	117	同	同同		同	河北

番号	仮番号	形状、大小	発掘状況	遺物	調査月日	調査者
二九	2	同	石室なし		同	江坂
三五	6	同	同	直刀一	同	江坂
三六	7	同	箱形石棺粘土塗丹彩	刀子	同	江坂
三七	8	同	箱形石棺丹塗	頭蓋・四肢骨片	同	山鹿
三九	10	円墳	截石箱形石室丹塗	頭蓋・下顎・四肢・骨盤等の骨	昭和二三・十一月	江坂
四四	22	円墳	石室の設備なし		昭和二三・八月	相馬中学校
四九	29	円墳	川石積船形石床	石製模造品・臼玉	昭和二三・十一月	清水・山鹿
六〇	302	円墳封土ヲ失フ	石積長方槨	直刀・刀子・轡・鏃	同	河北
六一	303	同右	同右	勾玉・管玉・棗玉・切子玉・丸玉・小玉	同	河北・松本
六二	304	同右	同右	直刀・刀子・鏃	同	清水
六四	306	円墳	箱形石室	直刀・刀子	同	清水・河北江坂
七〇	311	円墳封土ヲ失フ	石積長方槨	金環・短刀・刀子・鏃・馬具類	同	清水

じめ記録類にも全てこれを用いたのであるから、本稿でもそのままにしておいた。ただし表の最上段の番号は先生が本報告の執筆を頭に画かれ、その構想の中で組み立てられた古墳群の区分に基いたものかと推察し得るが、その新らしい区分の内容であるとか、略報告である史学誌上の表に何故わざわざ二種の番号を併記されたのか、今日知る術もないのが遺憾である。ただ、さきにも触れたように古墳の数が非常に多い上にその規模が小さく、地形も斜面あり、森林あり、宅地ありと錯雑して群の確認がむづかしいから、経験豊かな先生は何等か独自の方法をもって処理しようとされたのではなかったかと思うのみである。



第1図　第8号墳実測図



第2図　第8号墳石室実測図

（八）其　他（古墳調査の際に左の三件の実査と検討が行われた。）

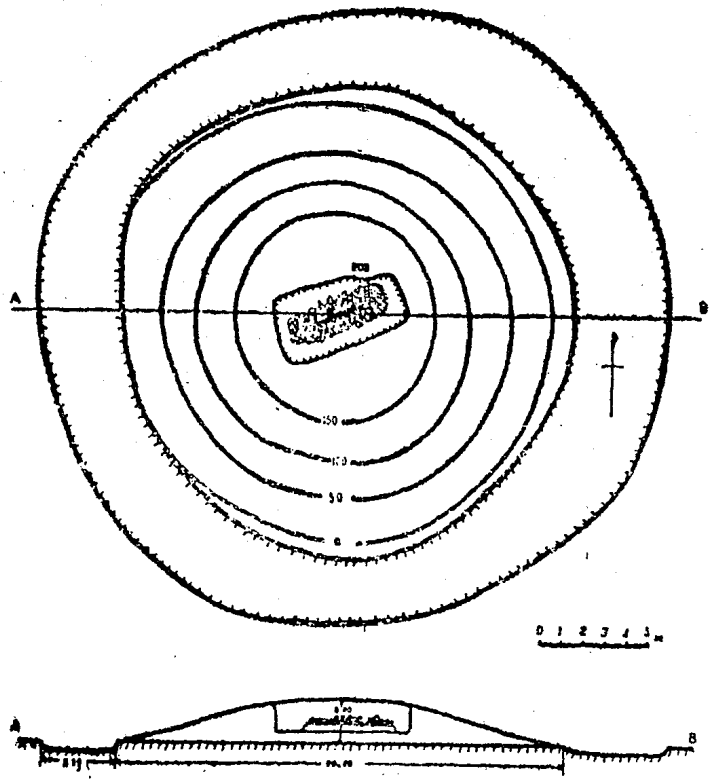
名称	形状、大小	調査状況	遺物	調査月日	調査者
大谷地土城址	長方土城 環濠	城内礎石列	土師器	二三・七月 十一月	藤田・堀田
新山横穴				二三・八・一	
磨崖仏				二三・十二月	

（五）第一次発掘の成果について

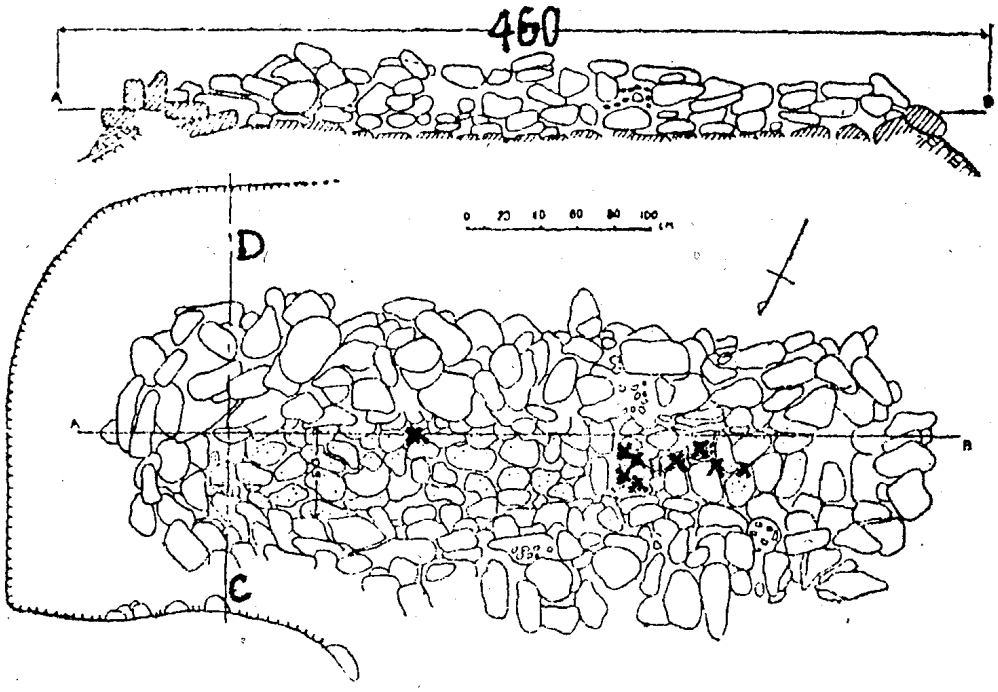
ここで第一次調査の成果をもう一度振りかえって要約を試みたい。此の度の発掘によって、第二、六、一一七、一一八の四基の古墳の場合には石室などの埋葬施設が発見されず、遺物の点でも第六号墳において直刀一個を見出した外は皆無という結果に終っている。しかし第七号墳においては箱形の石室が見出され、粘土を塗った上に赤色塗彩が施こされ、内部に刀子一個を副葬していた。また第八号墳では同じく赤色の塗彩を施こした箱形の石室があって、内部に頭蓋骨、四肢骨など被葬者の骨格の一部が残っていたものゝ、副葬品は発見されず、この古墳群における〝薄葬〟ともいうべき特色を観取したかに思われた。ただし一一六号墳においては長方形をなす積石の小石室が見出され、その内部に刀子一個が発見されているから、速断は慎しむべきものと思う。

次に清水が山鹿君と共に調査した第二九号墳は径二一メートル、高さ二メートルの本古墳群中では最大級の円墳であったが、周湟をめぐらすことが確認され、墳頂下約八〇センチのところに長さ四・六五メートル、幅一・〇八メートルの細

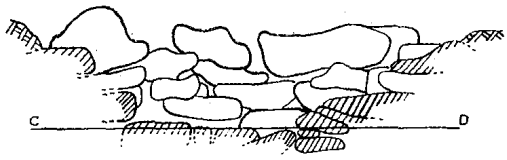
長い舟形の石槨が発見された。この石槨は内法で長さが三、〇五メートル幅四〇センチを測るが、これは今回の調査における最大規模の内部施設である。しかも川原石を小口積に構築している点が特異であり、当時としては全国的に見ても類例が少い点が注目されたのである。惜しいことにその時点では天井に当る被覆の状況や構造を明らかにする手がかりがつかめなかったので、藤田先生は〝石床〟と報告されているが、私は何等かの施設があったのではないかと考えている。この点についてこれまで詳しく述べたことはないけれども、その後岩手県北上市の猫谷地古墳群で同じく川原石を小口積みにしたかなり大形の横穴式石室が数多く造られていることが知られるようになった。現地について実査してみると両者の類似には興味をそそるものがある。ただ大きく異る点は真野二九号墳の場合では側壁と天井の構造がやや不明瞭で〝礫床〟と呼ぶのが適当かとさえ思われる事実であろう。しかし川原石を小口積みにするという手法に限って論ずるならば、他に類例の少ない特殊なものと云うほかはなく、さらに十分な検討を加える必要があると思われる。すなわち「東京都文化財調査報告書第三集」（昭和三十一年三月東京都教育委員会）に後藤守一氏が報告された西多摩郡多西村大字瀬戸岡にある瀬戸岡古墳群の第一号、第五号墳はかなりよく似た構造を持つように思われ、とくに真野の場合ほとんど不明であった被覆の手法が、ここでは主体部を小形の扁平石で覆っていたものとして復原され得たところに重要な示唆があろうかと思われる。私はとくに自ら発掘した此のような珍らしい石室に今なお若干の疑惑と深い興味とを覚えざるを得ないのである。さらに細長い石室の東部に偏って群在した副葬品がすべて淡青色を呈し一部に淡い褐色の縞文様の見える特徴的な滑石で作られた所謂石製模造品に限られ、それらが一般の同種の模造品より幾分大形で厚味があり、周縁部に丸味をもった仕上げであることに特色を見出し、今後もさらに検討を続けてゆきたいと考えている。それらの模造品の種類と数を挙げれば刀子7、鎌1、鏡1、四脚付盤（槽かとも思われる）1、斧1、臼玉1の計六種十二個を数えるが、長大な舟形石槨の中央部より西寄りに偏って群在しており、臼玉のみがやや東部に離れて単独に発見されている。最大限の注意を払いつつ調査したにも拘らず、他の遺物が全く発見されていないことも留意を要するであろう。さらに藤田先生はこの石製模造



第3図　第二九号実測図



第4図　第二九号墳石槨実測図　×印ハ石製模造品出土位置



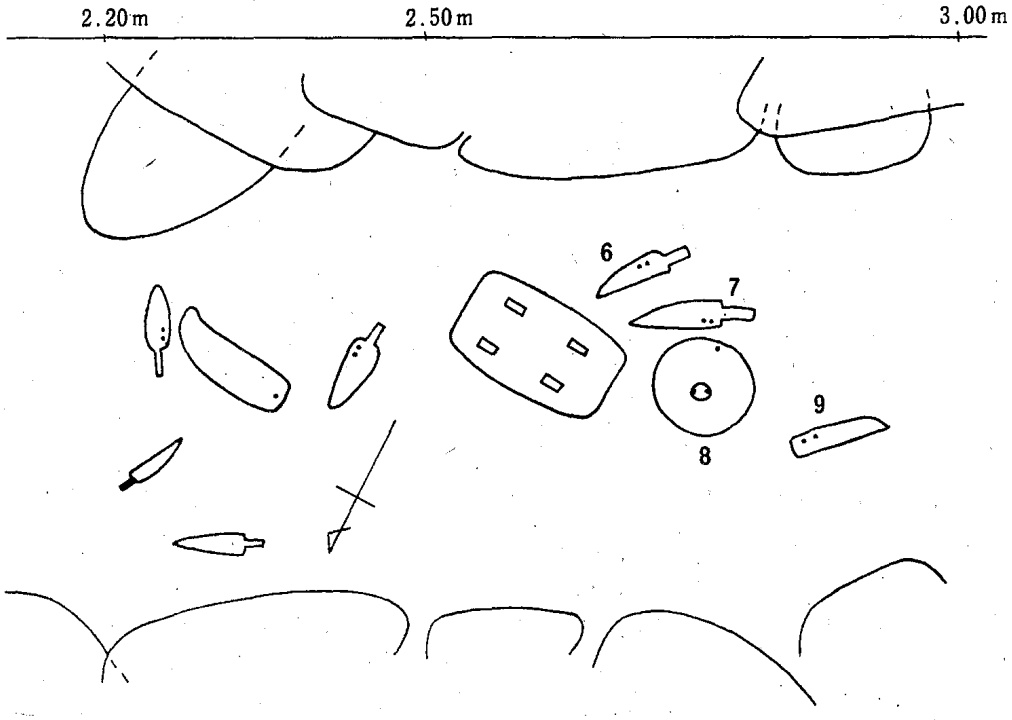
第5図　第二九号墳石槨　C－D断面

品の原石は真野川中流域―古墳所在地より真野川を約十キロ遡った上栃窪にある堂六神山の山麓に産する滑石で作られたものと推定されたのであった（次頁第六図参照）。

これまで述べた諸墳とは少し離れて群在するために番号を特に三百番代とした第三〇二、三〇三、三〇四、三一一号の

四基はまた別の意味で特色のある古墳であった。それらは既に封土を失っていたが、すべて同種の長方形の石室をもちながら副葬品に著るしい特徴が見られたのである。

すなわち三〇二号は直刀、刀子、轡、鉄鏃を、三〇三号は勾玉、管玉、棗玉、切子玉、丸玉、小玉を、三〇四号は直刀、刀子、鉄鏃を、三一一号では金環、短刀、刀子、鉄鏃、馬具類をという工合であり、さらに三〇六号は箱形の石室を持ち、直刀と刀子のみを出土した。また、それらのうちで三〇二、三〇三、三〇四、三一一の四基は封土が調査直前に工事のため削平されていたことを附記しておく。さきにも触れたように、これら三〇〇番代の番号を与えた古墳は一カ所に群在すると同時に内部構造においてはあまり差違がないにも拘らず、副葬品の種類がそれぞれにおいて特徴的であるのが面白い。仮に武器武具を主とするものが男性の墓であり、三〇三号墳のように玉類のみが見出されるものは女性ではないかというように被葬者の性別を窺うのも興味ある課題ではなかろうか。ただ被葬者の骨格が消滅し去っている今日、多くを語ることが出来ないのは当然である。



第6図　第29号墳石製模造品出土状態（西南部）実測図

（六）第二次発掘調査

われわれが寒さの到来と予想外に長期化したため十二月五日に調査を打ち切ってから、約二年を経た昭和二十四年一月になって、前回調査の際にも壁土採取者のためにかなり破壊されつつあった第一一一号前方後円墳が再び彼等の手によって掘り崩され、クビレ部に石室が現われ、金銅製品などが発見されたという報せが届いた。そのため清水は江坂君と共に現地に急行し、その状況を実査した。出土の際には福島県教育委員会の梅宮茂主事が後藤守一博士と共に現地に赴かれ、幸いにも出土遺物の散逸を防がれたのであったが、それらは直刀と魚形の金銅製品で〝魚佩〟と呼ばれる遺物であり、とくに後者は古く滋賀県鴨の稲荷山古墳から発見されて著名であるほかにはその出土例がさほど多くない珍らしい遺物であるから、この古墳群の被葬者が予想以上に関西方面と関係の深い人たちであったらしいことに驚かされたのであった。

また此の前方後円墳の主体部は丁度クビレ部の中央に営まれた一種の竪穴式石室であり、その平面形が正方形に近い四角形であること、さらに先に述べた寺内第二九号墳に似て川原石を小口積にしたものであることに驚ろかされた。

さらに第一次調査の際にわれわれは壁土採取者がいわゆるクビレ部を掘り下げていたので、その穴から後円部へ向けて発掘したにも拘らず、数十センチの差で石室の壁に到達し得なかったことも明らかになった。従って同様に埋葬施設を発見し得なかった第一一五号前方後円墳にあっても、同じくクビレ部に主体部のあることが予想されるに至ったのであった。

その点を再検討するために同年七月十九日から二十六日まで清水、江坂の両名が第一一五号前方後円墳の発掘調査を行ったところ、果してクビレ部の南側に羨門を開き、しかも玄室の長軸に対して直角に羨道が設けられている平入り片袖形ともいうべき極めて特異な横穴式石室の存在を発見したのである。ただ副葬品にはあまり見るべきものがなかったのが惜しまれた。ところが、後年になってこのようなクビレ部に開口し、前方後円墳の中軸線に対して斜めに羨道玄室を設けた

古墳が九十九里沿岸の千葉県山武郡松尾町蕪木において調査され、必らずしも真野古墳群のものが唯一例とは云えなくなったが、いずれにせよ貴重な発見であったことは云うまでもない。

その後しばらく真野古墳群を訪れる機会がなかったが、昭和三十二年に至って、これまでの調査に当初から援助を惜しまれなかった大内重春氏から通報があり、寺内古墳群の東端にある古墳（二五一号墳）から石室の一部が現われたことを知ったので、筆者は学生山口正道君を伴って急遽発掘を行い、組合式石棺を主体とするものであることを確かめた。さらに四年後の昭和三十六年にも大内氏の通報があり、町営住宅の建設工事によってこの古墳群の南部にある数基が破壊されることになったので同氏の要望にこたえて江坂君をはじめ近森正、鈴木公雄、渡辺誠らの諸君に出張して貰い六基の古墳を発掘して記録保存の実をあげることができた。しかし此の際の調査では特に従来の知見を新らたにするものがなかった。

（七）所謂「土城址」について

昭和二十二年の第一次調査を行うに当って藤田先生が最も興味を懐いておられたのが此の「土城址」である。これは大谷地古墳群の南、とくに我々が一一五号墳と名づけた前方後円墳に接して残されていた長方形の土塁の跡である。土地の人々には〝真野長者伝説〟が語りつがれていて長者の館址とも、また寺内の南の丘にある城址の倉であったとも云われていた。昭和二十二年七月末最初に藤田先生が予察に赴かれた時には一メートルほどの深さの空濠をめぐらし、四辺に土塁をめぐらして堂々たるものであったという。ところが十月に入って開拓営団の工事が進捗し、われわれの第一次調査が開始された十一月には濠や土塁がほとんど破壊されており、その性質を明らかにすることができなかった。藤田先生は京城大学に居られたため大陸の城址についても造詣が深く、わが国古代の城砦との比較研究上貴重な資料として特に注目され、われわれに期待の言葉を洩らしておられたから、調査員一同の失望も大きかった。今ここに止むを得ず、先生が「史

学」に書かれた前記報告の概要を引き、改めて記録しておきたいと思う。

すなわち此の城らしき遺址は真野川の造った断崖上の平坦部にあって南北四四メートル、東西約三四メートルを測り四隅に僅かに丸味をもった長方形を呈する。そのうち空濠の幅一・八～一・九メートル、土塁の幅約三米を除いた域内は平坦で、東部の中央に当って門址が認められた。濠の深さと土塁の高さは共に約一メートル余であった。古くは遠く西南方の池から水を引いて濠に注いでいたと云い、その導水路が一部ではあるが残存していた。土塁の上には大木が並んでいたらしく、先生はその切株を実見しておられる。われわれが十一月に到着した時は既に土塁を残すのみで壊滅状態にあったのが遺憾であったけれども、先生はそれに加えて土塁の内側にあり、約二メートルを隔てて走る土堤に沿って五列ないしは六列に並ぶ、自然石の礎石と覚しきものが東北西の三方に残存していたと記されており、それらの礎石は三〇～四〇センチの川石で下に砂利敷の列が見られたとも書かれている。さらに先生は非常に長い廻廊か倉庫であったと見られ殿閣の跡とは考えられないとも指摘されている。しかもこの土城内には瓦も土器陶器の破片も見られない点を指摘し、あまりにも整然たる構造から古墳の時代とは相当の隔たりがあろうとされ、〃奈良朝以後の館址とするには建築址に疑問があり、山上の城址の研究と共に改めて調査の必要がある〃と述べておられる。過日筆者は冒頭に記したように現地を訪れているが、この辺りは完全に旧態を失っており、恐らくは解明の機を失ったかと思われたのが残念でならない。

（八）考　察

右に縷々として述べた数次に亘る調査を行ってから二十年の月日が経ち、その間に藤田先生はもとより植松練磨氏、渡辺晴雄先生、但野修清氏ら現地の方々が相次いで世を去られたために、私も絶えてこの地を訪れることがなかった。先に述べたように昨年の十月に史跡に指定されたことによって現地を訪れる機会をもつに至り、懐旧の念に加えて新らたな眼をもって古墳群に相対してみると、調査の当時から、また新らしい発見のある度に思いを馳せていた幾つかの仮説とでも

いうべきものが次第に現実のものとなりつつあることを知り、心の躍る思いがした。それでは今なにが新らしい課題となりつつあるのかを述べてこの稿を結ぶことにしよう。いずれも今後の厳密な検討を必要とするにしても、それが必らずしも徒労ではないと思うからである。

(i) まず初めに古城址とそれを囲むが如くに分布する古墳群はなぜ此の地に営まれたかという疑問から考えてゆこう。かつてはあまり意にとめていなかったけれども、今あらためて現地を思い浮べつつ地図を拡げてみると、この真野川の下流域の平野が肥沃であることに加えて、古くはこの川の鹿島町市街より東方に当る下流域が大きな湾をなしていたのではないかと思われてくる。北方の細長い丘陵を越えた小さい谷状の平地は八沢浦干拓と呼ばれ、昭和初年頃の干拓地であるという。真野川河口においても海抜五メートルのコンターは現河口から三キロ弱のところを走っており、きわめて低平であって、時代は明らかではないが人口的な干拓地である疑いが濃い。若し古墳時代にこの工事が行われていなかったとするならば—当然のことのようにも思われるが、海岸線は大きく彎入して港湾として利用可能な地形ではなかったか。真野川はさらに上流へ向けて舟運の便を提供していたのであろう。私はここに古代鹿島の港を瞼に描いてみたい。真野古城址もそのような地形の下で、一層防禦的な意味を増すのではないかと思う。

さらに大胆な推測を試みれば、この鹿島から仙台湾までの海上は直線距離がおよそ八〇キロだということから、多賀城への海上交通の上で大きな役割を果していたのではないかとも思うのである。古代の船舶がどのようなものであったかは私の専門とする研究課題であるのに実はよく解ってはいないことを知悉した上での発言で無責任のそしりを免れないが、ひとつの仮説として記しておきたい。

そのような仮説を臆面もなく持ち出した裏には、古墳に関しても同じような見解を持っているからである。既に記しておいたように、寺内古墳群の第一一五号前方後円墳は墳丘のクビレ部に開口する「平入片袖形」とでも呼ぶべき珍らしい石室をもっていた。それに似た石室を持つ古墳が九十九里浜に臨む千葉県松尾町にあることも既に述べた。

私はここに古代における太平洋沿岸航路とそれに伴う文化の動きを想定してみたいのである。古墳だけからの推測は危険だとは思うが、さきに真野二九号墳について述べた際に必要以上にその礫槨にこだわったのも、遙かに北方の岩手県下のそれはともかくとして、類例として挙げた東京都瀬戸岡の古墳がかなり上流とは云いながら多摩川を遡った河岸にあって、同じく船を用いた水上交通によって両者の間に文化交流の跡を辿り得るのではないかと思うからである。この〝海上の途〟がかなり乱暴な推理だとしても。加えて数日前に某君から耳にしたところでは長い間類例を見なかった類似の石室が最近茨城県から発見されたということであり、敢て記して大方の教示を得たいと願うものである。蛇足を加えれば多賀城の研究が進んで、この城が東方の海へ通ずるルートを意識しているらしいという新らたな見解が出されている事実も見逃し得ないのではなかろうか。

(ii)　それと共にこの真野古墳群の所在地すなわち鹿島町の辺りに、嘗て〝浮田軍団〟が置かれていたという伝承がある事実をとり上げてみたい。われわれは前記の〝土城址〟を調査することによって、この軍団について何等かの知見を得たいと考えていた。しかし、これもさきに記したように破壊が先行し、ほとんど何物も得ることができなかった。ただ既に述べたように、もし当時の真野川の下流域が海湾をなしていて、わが国の太平洋沿岸航路の重要な拠点であったとするならば、真野川河口を扼する最適の位置にあり、しかも急崖をなした地形から見て軍事上の要点であった可能性を必らずしも否定しがたく、浮田軍団の実態は明徴を欠くとは云え、単なる浮説として忘れ去るべきものとも思われないことに留意しておきたいのである。

(iii)　横手の古墳群と寺院址

最後に鹿島町の古代遺跡を考える上に、見逃しがたいと思われる古墳群と寺院址について触れておこう。この両者は従来誰もあまり言及していないが、私は鹿島の地を訪れる度に故渡部晴雄先生に導かれて見学を繰返し、この度も自動車の窓からではあったが旧態をとどめているのを確認することができた。

鹿島町の市街の中央を国道が東南から北西へ向けて延び、常盤線の線路がその東側を並走しているが、市街地を過ぎて約一キロで横手の集落に入る。この辺りから字浮田にかけて大形の円墳が点在しており、古くから横手古墳群の名がある。まだ正規の発掘調査を経たものがなくて外観しか知ることができないが、真野古墳群の墳丘が小形であるのに対して北国には珍らしく大規模で前方後円墳も含まれていることに気付く。中には深い周濠をめぐらすものもあり、今後とも保存に留意を要すると同時に、十分な検討が加えられるべきものと考える。今は詳述する資料も暇もないが、私が指摘したいのは西方の丘上にある真野古墳群が小規模な墳丘、簡素な内部構造を持つに止まり、副葬品も金銅製魚佩を除くと質量ともに見るべきものがなく、時代を確定するのが困難であると同時に、その特徴にはかなり地方的な香りが強いとせねばならぬ。それに反して外観のみからでは軽々しく断じ得ないにしても、横手古墳群は被葬者をはじめとして築造した基盤を異にするものかと疑われるのである。また古墳群の間に埋もれるように寺院址が残されているのも面白い。造り出しの痕跡がある礎石があり、若干の古瓦も発見されているが年代は平安時代かとも思われる程度で確認は得られていない。要するに最後にこの鹿島町北部の平地に残された古代文化と南方台地上の真野古墳群を生んだ古代文化との比較研究こそ、今後に残された課題であることを指摘しておきたいのである。

今回久し振りに筆をとり真野古墳群の考察を記すことができたのは喜ばしい限りである。ただ多くの方々が既に他界されてしまい、示教を受けることのできなかったのが遺憾であり、とくに藤田先生の叱正を受けられないのが残念でならない。また此の小考もほとんど〝随想〟であって学術論文とは云い難いのも恐縮であるが、既に調査当時の実情を知る人も少なくなっている際とて、何等かのお役に立てば幸いである。他方では藤田先生の遺志を継いで纒った報告書を公けにしたいと念じているので今後とも多くの方々の御支援を得られれば幸いであると思う。同時に、本稿が真野古墳群の保存と顕彰に役立つならば幸いこれに過ぐるものはない。

（一九八〇・五・十一）